

High School Human Rights

(高校人権教育通信 第11号) 平成26年(2014年)11月7日
発行 長野県教育委員会教学指導課心の支援室
発行人 永原 経明(心の支援室室長)
kokoro@pref.nagano.lg.jp

人権教育は「坂道のトロッコ押し」

「一人一人が個性や多様性を尊重し、異なる考え方や生き方を認め合い、すべての人が互いに支えながら、共に生きる社会※」の実現に向けて、学校における人権教育の取組の重要性は日々増えています。特に高校での人権教育は、生徒にとって人権を体系的に学ぶ最後の機会となる場合があります。人権教育は山頂を目指してトロッコを押す活動に似ています。山頂に近づくには1歩1歩前に押し続けること、力を抜いた途端に現在地よりも後退してしまうことにもつながります。学校生活を通して他者との共感やコミュニケーションに係る力、具体的な人権問題に直面してそれを解決しようとする行動力の育成が、変化の激しい時代の中で、自分も他者もその人らしく生きていけるために求められています。 ※「長野県人権推進基本方針・基本理念」

心のバリアフリー ～障がいは「障害」じゃないんだなあ～

障がいのある子どもを取り巻く学級集団が、一人一人の違いを認め合ったり、困っている友達を助け合ったりできる集団である場合には障がいのある子どもも安心して生活できます。ある高校の先生から次の一文を寄せられました。

高校2年生のHくんは、生まれつき四肢不自由で、車いす中心の生活を送っています。階段は昇降機使用、登下校には母親が付き添う毎日で、さぞかし周囲の手厚い支援のもとで生活を成り立たせている・・・かと思いきや、それはそれは「普通の」高校生活を謳歌しているのです。一見、担任や周囲のクラスメートの対応は「冷たい」です。教室は普通に3階にありますし、机や椅子を動かす時も、誰もHくんの手を貸してあげません。授業中に板書の順番が来た時も、普通にHくんは出てきて、「よいしょっ」と教壇に上がり、1字1字、手を振り上げるように必死に字を書くわけです。またその姿を、クラスのみんなが笑うのですが、本人、ウケを取れてにんまり・・・そうなのです。Hくんはまったく特別ではないのです。

圧巻は文化祭のダンスイベントでした。クラス全員がステージで踊る中、中盤で友だちに背負われてHくんが登場！そっと下ろされた後、センターで、見事にソロダンスを踊りきったのです。さんざん練習したというそのキレ、その迫力、何よりみんなの満面の笑顔に本当に圧倒されました。全校が見守る中でなにも気負わず、特に感動を演出するわけでもなく、当たり前にもみんなで踊りきったステージに、拍手喝采が送られたのでした。

「障がいは個性だ」なんて口で言うのは簡単ですが、こんなに当たり前、当然のこととして日々過ごしているHくんと、そのクラスの姿に、清々しささえ感じます。Hくん本人の明るさや賢さもあるのですが、心のバリアフリーって、こういうことだなあと、今日も楽しそうにじゃれ合っている彼らを見ながら、こちらも前向きに明るい気持ちになるのでした。

障がい者に対する偏見や差別をなくすためには、まず障がい者や障がいに対する正しい理解と認識を深め、心と社会のバリアフリーやノーマライゼーションを進めるための課題を学び合いたいものです。障がいのある子どもが、学級の中で居場所をつくり、安心して生活するためには、障がいのある子どもの対人関係の力を高めるとともに、受け入れる子どもたちの対人関係の力や人権意識を高めることが大切です。友だち同士の適切なかわり方を学ぶにはソーシャルスキルトレーニングなどが有効です。

ソーシャルスキルトレーニング 「ソーシャルスキル」とは対人関係や集団行動を上手に営んでいくための技能(スキル)を習得するための練習。一般的な展開方法は次のとおりです。
「教示」→「モデリング」→「リハーサル」→「フィードバック」→「般化」

1つ発言から考える ～ アイヌの人々に関する発言について ～

この夏、札幌市議会議員が自身のツイッターで「アイヌ民族なんて、いまはもういないんですよ。せいぜいアイヌ系日本人が良いところですが、利権を行使しまくっている」「利権を行使しまくっているこの不合理」と書き込み、大きく報じられました。覚えている方も多いと思います。

「アイヌ」は、アイヌ語で「カムイ（神々）」に対する「人間」を意味します。アイヌの人々は、古くから北海道や樺太、千島列島を中心に暮らしている先住民族で、狩猟・採取・漁労を中心とした生業を営む中で独自の言語と文化を育んできました。北海道が平成25年に実施した「アイヌ生活実態調査」によれば、北海道に住むアイヌの人々は66の市町村で約16,700人（平成18年調査72の市町村で約23,700人）となっています。

明治時代以来、和人による北海道開拓で、アイヌの人々は狩猟と漁業の場と住む場所を失い、独自の文化も「悪習」とされ、同化が進められました。このように生活と文化は大きな打撃を受けました。北海道の歴史の中で貧困生活を強制され、差別を受けてきたアイヌの人々に対して北海道や道内の市町村はアイヌの人々を対象とした住宅資金の貸付制度や奨学金制度を設けています。この問題を通して「共に生きる社会のあり方」を生徒と一緒に考える場合の導入として次のような〇×形式から始めることが考えられます。

- ① 日本は単一民族国家である。
- ② 日本人はヤマト民族である。
- ③ アイヌ人は、交易を得意とせず、狩りや漁による自給自足の生活をしてきた。
- ④ 明治政府は、アイヌの人々に対して「保護法」をつくった。

【アイヌの人々をめぐる動き】

明治32年（1899年）明治政府、「旧土人保護法」制定
平成19年（2007年）「先住民族の権利に関する国連宣言」
平成20年（2008年）衆参両院で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が採択。
政府が先住民族と認定

【特定の人種・民族への憎悪をおおる憎悪表現（ヘイトスピーチ）について】
国連人種差別撤廃委員会、日本政府に対し、法律で規制するよう勧告する「最終見解」を公表。「デモの際に公然と行われる人種差別などに対して、毅然と対処すること」を要求。（2014年）

世の中で起きていることは私たち教職員が生徒とともに人権感覚・意識を醸成していく上で有効な教材になります。ニュースで取り上げられた出来事をホームルームや、授業、学年通信などで取り上げてみてはいかがでしょうか。ある先生はホームルームで「この発言」を紹介した後、このように語ろうと考えています。

自分が思ったことなら、何でも言っているのでしょうか。人を傷つけることでも、迷惑になることでも。そもそも、本当の事とはなんだろうか。ある人にとっては本当のことでも、別の人にとっては本当でないこともある。何気ない一言でも、少し立ち止まってみよう。自分の言葉を受け取った人のことを考え、その人の心に寄り添い、理解しあおうと努力することは、決して無意味ではない。

長野県ではアイヌの人々を取り巻く問題を「様々な人権課題」の1つとしてとらえ、取り組んでいます。アイヌの人々の文化や伝統は、今日では十分に保存・伝承が図られているとは言えない現状にあります。また、アイヌの人々に対する偏見や差別の問題があります。問題の解決に向けて、例えば信州の三信鉄道敷設工事に活躍したアイヌ民族技師「川村カネト」の生涯（参考：飯田カネト合唱団が「カネト物語」を各地で公演実施中）を取り上げて、アイヌの人々の歴史、文化、伝承及び現状に関する認識と理解を深め、アイヌの人々の人権を尊重する観点から取組を推進していくことが考えられます。生徒と一緒に世の中の出来事を考える中で、正しい理解と認識を深め課題解決に向けた意識づくりに取り組みたいものです。

《出典・参考文献》 『人権教育指導資料集 人権教育を進めるために』（長野県教育委員会）

『Human Rights in Nagano 高校用同和（人権）教育指導資料』（長野県教育委員会）